

まずは心のバリアフリーから

学校法人駿台甲府学園駿台甲府中学校三年 前嶋 亜希子

私の母の友人の子供さんは、筋萎縮性側索硬化症（ALS）という難病だ。私が幼稚園生のころからよく遊びに来てくれた。ALSという病気だからといって皆が特別扱いしていなかったため、私も同じように接していた。しかし、私の家にある小さなすべり台を登るときに誰かに支えてもらわなければ登ることができなかつたり、物を上手く持つことができなかつたりと不自由な思いをしていたのだろうとを感じる。私が初めて疑問を持ったのは、その子供さんが中学校からは支援学校へ通うのだということを知ったときである。問題無く会話ができるのになぜ違う中学校へ行くのだろうと思ったのだ。今考えれば、階段などの段差を登り降りできないなどの理由だったのだろう。現在は高校生で、支援学校へ通っているそうだ。ALSという難病について調べてみた。手足、のど、舌の筋肉や呼吸に必要な筋肉がだんだんやせて力が無くなっていく病気だと知った。それならば、いつかは歩くことができなくなり、やがて呼吸さえできなくなってしまうということだろうか。私は怖くなった。そして、小さい頃からそのような怖い病気と戦い続けている子供さんやお父さん、お母さんや周りの方々はすごく努力しているのだろうと思った。さらに調べてみると、ALSという病気は誰でも発症する可能性のある病気であることが分かった。年齢によって発症しやすさに差はあるものの、私も発症してしまうかもしれないのだという事実をしばらくの間受け取めきれなかった。他人事ではないのだ。

また、私の祖父は足が悪い。いつもゆっくり歩いていて、少し足を引かずっている。階段などをつらそうに上っていたり、できるだけ避けていたりする。祖父の家には階段があるが、私は祖父が上っているところを見たことが無い。だから、たくさん歩く場所には一緒に行けない。ありがたいことに、今は命に関わるような大きな怪我はしていないが、今後いつしてしまうか全く分からないため不安だ。また、以前祖父はこんなことを言っていた。

「一人で買い物をするとき、レジでどうしても時間がかかってしまう

から嫌味を言われてしまって申し訳なく思った。今はもう慣れたけれどね。」

と。嫌味に慣れるとはどういうことだろうか。慣れてしまうほどたくさんの人から様々な言葉で言われたのだろう。確かに私も遅いなど思ってしまうことはある。しかしそれを口に出したことは一度も無い。自分が言われたら嫌な言葉だからだ。歳をとれば筋肉や骨が衰えるということはほとんどの人にあてはまることだ。だが、それを自分よりも弱い立場だから何と言っても良いなどと間違った解釈をしている人がごく一部にいるのだろう。けれども祖父は、

「悪い人ばかりじゃない。道を尋ねたらわざわざその場所まで一緒に行ってくれた人がいた。荷物を持ちましょうかと言ってくれた人もいた。」

と言っていた。私は、はっとした。道を尋ねられたとき、私はその場所まで一緒に案内できるだろうか、自分から荷物を持ちましょうかと言えようかと考えた。間違ったことを間違っていると主張することはできても、正しい、役に立てると分かりきっていることを行動に移すことは実は難しいのではないか。だとすると私も他人事として考えてはいないだろうか。ただ「かわいそう」だと言っているだけで何も行動していない。いや、「かわいそう」と言っていることも、勝手に相手を下に見て考えているのかもしれない。

人は皆必ず平等であるべきだ。しかし、私を含めて社会が健常者と障がい者を区別してしまっているのではないか。差別している人も中にはいるだろう。私は、今の社会は目が視えない、耳が聞こえない、歩くことができないなどの人が暮らしにくくなっていると感じる。できない、苦手なことは皆ある。速く走ることができない、泳ぐことができない、など様々だ。ただその事柄が違うだけである。では、区別が無くなるための方法とは何だろうか。いちばんに思い付いたのが「バリアフリー」だ。これは、スロープを設置しよう、車いすでも利用できる高さにしよう、など優しいデザインだが実現に時間がかかってしまう。だから、まずは私たちの心のバリアフリー化から始めるのはどうだろうか。一人一人が、障がい者も健常者も同じように生活できるのが当たり前であるという意識を持つことが大切だと私は考える。